

放送大学放送教材の素材映像アーカイブ化

—特別講義『HUMAN：人間・その起源を探る』のラッシュ・フィルムを事例に—

大石 高典¹⁾・山下 俊介²⁾・内堀 基光³⁾

Archiving of educational films produced by the Open University

—From the special lecture series, “HUMAN: A quest for the origin of humanity”—

Takanori OISHI¹⁾, Shunsuke YAMASHITA²⁾, Motomitsu UCHIBORI³⁾

要 旨

2011年度放送大学学長裁量経費による研究助成を得て、放送大学に保管されている放送大学特別講義『HUMAN：人間・その起源を探る』の一部素材映像のアーカイブ化を行った。一連の作品は、撮り下ろし現地取材に基づく単発のシリーズとしては、放送大学のみならず、日本におけるこれまでに最大の教育用人類学映像教材作成プロジェクトであった。未編集のものを含む当該講義取材資料のうち約40%に当たる部分のアーカイブ化を行うとともに、当時現地取材や映像資料の作成に関わった放送大学関係者と自らの調査地に取材チームを案内した研究者らを中心に聞き取り調査を行った。「ヒューマン」シリーズ撮影から、既に15年以上が経過しているが、狩猟採集民、牧畜民、焼畑農耕民など、アフリカ各地の「自然に強く依存して生きる人びと」に焦点を当てた番組の取材対象地域では、取材後も撮影に関わった研究者自身やその次世代、次次世代におよぶ若手研究者が継続的に研究活動を行っている。これらの研究者との議論を踏まえれば、「ヒューマン」シリーズのラッシュ・フィルムの学術資料としての価値は、以下にまとめられる。(1) 現代アフリカ社会、とくに生態人類学が主たる対象としてきた「自然に強く依存」した社会の貨幣経済化やグローバルゼーションへの対応を映像資料から考察するための格好の資料であること。(2) 同時に、ラッシュ・フィルムは研究者だけでなく、被写体となった人びとやその属する地域社会にとっても大変意味あるものであり、方法になお検討が必要であるものの対象社会への還元には様々な可能性があること。(3) 映像資料にメタデータを付加することにより、調査地を共有しない研究者を含む、より広範な利用者が活用できる教育研究のためのアーカイブ・データになりうること。本事例は、放送教材作成の取材過程で生まれた学術価値の高い映像一次資料は、適切な方法でアーカイブ化されることにより、さらなる教育研究上の価値を生み出しうることを示している。このような実践は、放送大学に蓄積された映像資料の活性を高めるだけでなく、例えば新たな放送教材作成への資料の再活用を通じて、教育研究と映像教材作成の間により再帰的な知的生産のループを生み出すことに貢献することが期待される。

ABSTRACT

In the late 1990s, the Open University's special lecture series, "HUMAN: A quest for the origin of humanity," was filmed on location abroad, and it remains the largest educational anthropological film production project ever undertaken in Japan. Professor Junichiro Itani supervised the project, which consists of two parts, primatology and anthropology, both of which reflect the academic career of Itani and his research group. In the anthropological part, the series featured people whose "livelihoods [were] highly dependent on natural environments," such as hunter-gatherers, pastoralists, and shifting cultivators. We made a digital archive (which includes migration of master tapes into XD-CAM files) of the anthropology portion of the series, which represents about 40 percent of the original rushes (unedited daily prints) of the series, with financial support from the President's discretionary budget of the Open University in fiscal year 2011. Target films for archiving included unedited films, most of which had not been

¹⁾ 京都大学アフリカ地域研究資料センター

²⁾ 京都大学総合博物館

³⁾ 放送大学教養学部教授 (「人間と文化」コース)

used in the creation of the teaching materials. We also interviewed people who had been involved in the planning, filming, and editing of the films to get background information. More than 15 years had passed since the time of the original filming at the various locations. At many sites, researchers were still continuing similar research activities over several generations. Our interviews with these researchers indicated that they see two primary academic values of the digital archive. (1) It can provide high quality audiovisual data to reconsider the past and present conditions of the subject populations whose societies have been strongly influenced by the penetration of a cash economy and globalization processes, especially in the last decade. From this perspective, the archives may also prove to be meaningful for the people and local communities involved in the projects. (2) With the added ethnographical meta data, the archived films have the potential to benefit researchers and students with broader interests. The specific case of digitally archiving shows that the Open University's primary audiovisual materials with a high academic value can be maintained for further use in scientific research and other educational activities. Such use of audiovisual materials will also encourage the establishment of a more recursive loop between research and the production of teaching materials.

1. はじめに

「ヒューマン (HUMAN) ～人間はどこから来たか～」は、1995～1998年にかけて、伊谷純一郎²京大名誉教授 (当時) の監修のもと、放送大学制作部が制作し、1996年度から1999年度にかけて15回にわたって放映されたテレビ媒体の放送教材 (特別講義) である。2000年度には全15回が再度放映された。地域的内容としては、国内の猿 (霊長類 (ニホンザル)) から、マダガスカル島を含むアフリカ (人類、大型類人猿を含む霊長類)、南米 (霊長類 (新世界ザル))、アラビア半島 (霊長類 (ヒビ)) までをカバーしている。

「ヒューマン」全体のうち、アフリカ地域の取材に関して言えば、当時の日本における若手から中堅のアフリカ研究者、とりわけ広義の人類学研究者の協力の下で、撮影され編集されたものであり、一般教育の領域のみならず、アフリカ研究および人類学領域における学問的な資料価値はきわめて高い。これは講義として放映された部分と同様、されなかった部分に関して当てはまる。それどころか、研究上からは、量的に、またおそらくは質的にも、非放映の部分がより重要とすら言いうる。このことは、アフリカ以外の地域・部分に関して、同様であろうと判断される。

現在、きわめて幸運なことに、放送されなかった部分のラッシュ・フィルムが大量に制作部に残されている。これをアーカイブ化して、随時利用可能なものとすることは、第一に放送大学の将来のテレビ媒体教材としての再利用、第二に広くアフリカを中心とする地域研究者および人類学者にとっての研究資料としての利用、という点で大きな価値を持つ。

「ヒューマン」は、撮り下ろし現地取材に基づく単発のシリーズとしては、日本におけるこれまでに最大の教育用人類学映像教材作成プロジェクトである。か

つて多大な取材費用・時間 (1988年に立案、1994年から予備調査開始) と人的資源 (1番組当たり研究者とディレクターそれぞれ3週間の予備調査、および撮影には4週間以上を投入) を投じて得られた映像資料の多分野における活用の途を開くことは、放送大学の担う大きな社会的責務を果たすことに通じる。

以上の理由により、2011年度放送大学学長裁量経費による研究助成を得て、未編集のものも含む当該講義取材資料のうち約40%に当たる部分のアーカイブ化を行うとともに、当時現地取材や映像資料の作成に関わった放送大学関係者、自らの調査地に取材チームを案内した研究者らを中心に聞き取り調査を行った。本稿では、このアーカイブ化作業と聞き取り調査の過程で明らかになった、(1) ラッシュ・フィルムを含めた「ヒューマン」関連映像資料の全体像と保存状況の概要について報告したうえで、(2) ラッシュ・フィルムそのものの学術的資料価値と活用法、および (3) 新たな教材作成のためのラッシュ・フィルムの再利用可能性について検討する。

2. 『ヒューマン～人間その起源を探る～』シリーズの概要

2-1. シリーズ全体の構成

「ヒューマン」シリーズは、アフリカで生まれた人間の起源を、主としてアフリカの様々な民族社会と、ヒトと類縁関係の近い霊長類の社会に探るというテーマ設定がなされている。比較的原始的な霊長類から大型類人猿、現生のヒトまでを、伊谷自身の人類進化研究の理論枠組みである「社会構造の進化」という観点で比較し、進化の道筋をたどるといった構成になっている。一巻ごとに45分で完結するビデオ教材15本により構成されている。その内訳は、1巻が自然人類学、8巻が霊長類学、残る6巻が人類学である。

¹ 以下、本稿では本教材を「ヒューマン」ないし、「ヒューマン」シリーズと呼ぶことにする。

² 伊谷純一郎：イタニ ジュンイチロウ、1926-2001、霊長類学・人類学。京都大学理学部動物学教室人類進化論研究室初代教授、京都大学アフリカ地域研究資料センター初代センター長など。人類学分野のノーベル賞とも言われるハクスリー賞を1984年に受賞した。

³ 番組タイトルは、企画段階、放送時等、種々の異同があるため、ここでは、最終的にVHSビデオパッケージ化され、丸善株式会社で販売されている放送大学ビデオ教材のリストタイトルを最終版として採用した。(http://pub.maruzen.co.jp/videosoft/houso/kyozai.html 2013年2月14日最終確認)

表1 「ヒューマン」シリーズの構成

No.	作品タイトル	発行年	取材対象	取材地域
1	『HUMAN～人間・その起源を探る～「原猿の社会」—マダガスカル』	1996	霊長類	アフリカ
2	『HUMAN～人間・その起源を探る～「ニホンザルの社会」—日本』	1996	霊長類	日本
3	『HUMAN～人間・その起源を探る～「新世界猿の社会」—コロンビア』	1996	霊長類	南米
4	『HUMAN～人間・その起源を探る～「牧畜民の社会と文化」—ケニア』	1998	人類	アフリカ
5	『HUMAN～人間・その起源を探る～「農耕民の社会と文化」—エチオピア』	1998	人類	アフリカ
6	『HUMAN～人間・その起源を探る～「呪術・宗教」—カメルーン』	1998	人類	アフリカ
7	『HUMAN～人間・その起源を探る～「家族・結婚」—ケニア』	1998	人類	アフリカ
8	『HUMAN「文化・言語の誕生」』	不明	霊長類	日本
9	『HUMAN～人間・その起源を探る～「オランウータンの社会」—インドネシア』	1997	霊長類	東南アジア
10	『HUMAN「ゴリラの世界」』	1999	霊長類	アフリカ
11	『HUMAN「砂漠の民の社会と文化—ボツワナ』	1999	人類	アフリカ
12	『HUMAN～人間・その起源を探る～「狩猟採集民の社会と文化」—カメルーン』	1997	人類	アフリカ
13	『HUMAN～人間・その起源を探る～「チンパンジーの社会」—タンザニア』	1997	霊長類	アフリカ
14	『HUMAN「人類発祥の地アフリカ』	1999	古人骨	アフリカ
15	『HUMAN～人間・その起源を探る～「マントヒヒの社会」—サウジアラビア』	1997	霊長類	中東

シリーズに含まれる番組の一覧を表1に示す³。各巻では、対象として取り上げられる霊長類の種が、ヒトと類縁関係の遠いサルからヒトに近いサルへとという系統進化に沿って、あるいは人間社会を対象とした作品では、民族集団がより古い生活形態である狩猟採集生活から新しい生活形態である農牧生活、さらには貨幣経済化へとという人類史に沿って配置されている。これらの作品構成には、社会構造の比較から人類社会の系統進化を追究しようという考え方が色濃く反映されている。地域的には、霊長類の中のニホンザル、オランウータン、マントヒヒ、愛知県犬山市の霊長類研究所の飼育チンパンジーを除き、全てがマダガスカル島を含むアフリカ大陸で撮影されている。撮影は、1990年代後半、その多くは1996年から1998年に集中して行われ、丸善出版から1巻あたり35,000円の定価で市販もされている。各巻の監修と脚本の執筆は、伊谷純一郎京都大学教授とその門下の霊長類学者および人類学者1～3名による。

2-2. 制作の背景と制作体制

「ヒューマン」シリーズは、「特別番組」であり、通常の放送教材とは異なる特殊な位置づけにある。シリーズ全体では、合計21名の研究者が関わっているが、そのほとんどが京都大学の出身であるか、伊谷に学問的影響を強く受けた人々であり、当時の放送大学の生物学や人類学の教育研究スタッフはまったく制作に関わっていない。これには、本プロジェクトが放送大学教員組織ではなく、制作部の主導により制作された番組であることが関係していると考えられる。

「ヒューマン」シリーズ全体のデザインは、伊谷によって練られ、それをもとに伊谷からそれぞれの巻の作品を担当する研究者に依頼がなされ、台本の作成が行われた。監修を担当した研究者らによれば、個々の作品で取り扱う内容や筋書きについて、伊谷は基本的

にかなり自由に研究者に任せていたと言う。1996年から1998年にかけて順次、これら監修担当の研究者が案内役となり、放送大学からはディレクターとカメラマンなど数名のスタッフが加わって、数週間から1ヶ月程度の海外ロケが最低1回、多い作品では3～4回にわたって行われた。東アフリカの調査地では、撮影の実務は「アイオス」というケニア、ナイロビにあったプロダクション会社が請け負っていたらしい（現在は解散）。伊谷本人は、全ての作品の海外ロケに参加したわけではなく、「ブッシュマン」など一部には共同監修者のみによる取材が行われた作品もある。総じて、「ヒューマン」シリーズの制作にあたっては、放送大学におけるふつうの放送教材作成とは異なる、大人数によるかなり大掛かりな現地ロケが行われたといわれてよい。海外ロケによって得られた素材映像は、放送大学制作部において番組制作に用いられたのち、整理・保管された。

2-3. 「ヒューマン」映像素材アーカイブ化の背景と経緯

「ヒューマン」映像素材アーカイブ化を行うことになった経緯を説明しておく。著者のうち大石が、2010年初秋にフランスのモンペリエで開催された、「コンゴ盆地の狩猟採集民」をテーマにした国際会議で、「ヒューマン」シリーズの監修に関わった神戸学院大学の寺嶋秀明博士から、「ヒューマン」のラッシュ・フィルムが近い将来処分されてしまうかもしれないという話を聞いたことに端を発する。

現在、「ヒューマン」のうち、「『狩猟採集民の社会と文化』—カメルーン」が撮影されたのとはほぼ同じ場所で、人類学的な調査研究を継続している大石は、大学院生として現地調査に行くかなり以前に学部教養課程における「自然人類学」の講義を受講した時点から「ヒューマン」シリーズの作品を見ており、特に初期

の研究を進める上で大きな影響を受けた覚えがある。また、思いがけず「ヒューマン」シリーズの撮影が行われた場所を調査地として研究を始めるようになってからも、先輩や同僚研究者だけでなく、地域住民たちから幾度となく撮影当時の思い出—それは、夜間の撮影における昼間のように明るい照明の話であったり、女性に交じって魚の手づかみを試みた伊谷純一郎氏がデンキナマズ⁴をつかんで大声を上げて手をしびれさせてしまった逸話などであったが—を聞かされていた。

そうした経験も踏まえ、ぜひラッシュ・フィルムを見てみたいという関心から、寺嶋博士の紹介で放送大学の内堀に相談し、2010年の年度末の時期に放送大学本部での素材映像の閲覧が可能となった。相当量のラッシュ・フィルムが存在し、そのほとんどが作品では使われぬまま放送大学に保管されていたことが分かった。実際素材映像の一部を閲覧してみると、研究資料として有用な部分が少なからずあることも分かった。これら予備調査の結果を踏まえて再度内堀に相談したところ、「放送大学制作部保存の『ヒューマン』ラッシュ映像のアーカイブ化」をタイトルに放送大学学長裁量経費プロジェクトを申請し、アーカイブ化に取り組むこととなった。

3. 放送大学映像素材のアーカイブ化

3-1. 放送大学映像素材の特質

「ヒューマン」シリーズのラッシュ・フィルムのアーカイブ化を通して筆者らが考えたこと、つまり、いわゆる放送大学映像素材のアーカイブ化について幾つか一般的なことを論じておきたい。

本稿をまとめるまでの「ヒューマン」ラッシュ・フィルムのアーカイブ化のプロセスの中で、他のアーカイブプロジェクトと同様に、多くの時間と労力を費やしたのが関係者や関係部署との交渉である。本アーカイブプロジェクトが対象とする資料群は、放送大学制作部の永久保管庫に納められていた。既に資料の生み出された第一の目的である放送教材として、再放送を含めて放送を終えてから10年を経過しており、その意味では役割を終えた非現用の資料であり、また放送大学の放送カリキュラム（「名講義」）によって再利用される可能性はあるにせよ、資料の活性は低い状態であった。

このような状態において、研究資料としての意義を再度見出し活用しようとする研究者の動きによって、資料のアーカイブ化が着手されたことは注目に値する。資料を主体として見た場合には、こうしたメディアの存在は、その第一目的が個別研究のための資料活用にあったとしても、結果的に資料そのものの保存に深く影響することになる。また研究者コミュニティによって、資料存在が忘れ去られずに記憶されてい

たことも、ある組織の資料が、外に開かれていることの意義の一例となっていることを指摘できよう。

また資料実体を物理的に保管していたスペースとその実際の運用を把握している人的なファンクションによって、いままで資料が残り、それによってアーカイブ化される可能性が高まったことにも自覚的になる必要があるだろう。加えて、資料制作に関わる関係者への聞き取りによって得られ、記録化された情報が、資料群の性質の記録と復元に極めて重要であることも注目すべきである。

ある組織の生み出した記録資料（母体組織の経営に直接関わらない資料、ここでは教育や研究資料）のアーカイブ化は、その活動の意義を含め自明なものは何一つなく、乗り越えられるべき課題は山のように積み上がり、ほとんど困難に思えるものである。ただし、こうした組織的なアーカイブ化のスタートアップを促進するような、そしてそもそもこうした資料のアーカイブ化を誘発する原因となっている、シンボリックなコレクションが必ず存在するものである。「ヒューマン」シリーズの映像群は、映像資料という放送大学のアイデンティティに関わる性質を持つこと、ある活用可能性を孕むだけの一定程度の量、そして内外の関心の高さから、放送大学にとってそうしたコレクションの一つになるであろう。そして、こうしたコレクションを構築する過程のノウハウを足がかりに、出来るだけスムーズにアーカイブ化が進められるような、アーカイブの意義を共有するような土壌を作り、また実際の手続きや制度を組織内に定めることで、交渉に関わる労力を軽減したスムーズなアーカイブ化を進めていくことができるはずである。

なお、アーカイブズとは永久保存記録群のことであり、資料群の物理的な保存はもちろん、組織的にかつ持続的に維持されるべき資料ということになる。本プロジェクトでは、いまだこれらアーカイブズのスタートアップとして行った資料整理の段階にとどまっており、（例えば物理的な資料情報の保存であるマイグレーション計画についても保障されているわけではない）、映像資料そのものの情報（コンテンツ）の保存とともに、本プロジェクトにおいて整理され記録された情報（コンテキスト）の保存もあわせて、今後関係者を含めて取り組みを進めていく必要がある。

3-2. 作業手法

資料整理の過程では、原秩序保存のアーカイブズ原則を最大限重視したとしても、資料群に対して何らかの操作を与えることになる。その際に重要となるのが操作の記録である。ここでは、資料群の性質に変化を与えた資料整理について概要記録を残し、後の資料活用の一助としたい。表2に「ヒューマン」シリーズのアーカイブ化に関わる2011年度の活動記録を示す。

⁴ アフリカデンキナマズ (*Malapterurus electricus*, MALAPTERURIDAE)。全身を覆うゼラチン質の厚い皮膚に発電器官をもち、同種が生存時に不用意に触れると瞬間的に発電し、ヒトを含む他生物を感電させる。

映像音声データシート No. _____

(1) 登録年月日 15年2月15日 登録者 野崎剛一

(2) 分野別 2 ①完プロ ②素材 ③その他 テープNo. G36A3555
2 ①授業科目 ②特別講義 ③共通教材 ④実験番組 ⑤その他

(3) 番組名 (素材名) 人間—その起源を探る—
狩猟採集民の社会と文化—ケメルーン

(4) サブタイトル ロケ素材 002 H

(5) 種類 ①D3 ②3/4インチ ③1/2インチ(40) ④1/2インチ(60) ⑤カセット ⑥その他

(6) 保管期間 5 ①1年間 ②2年間 ③3年間 ④4年間 ⑤その他

(7) 入手担当者 杉本勝久

(8) 記録(入手)日 15年2月1日 購入(評価)額 _____ 円

(9) 入手方法 2 ①制作 ②ロケーション ③複製 ④購入 ⑤寄贈 ⑥移管 ⑦その他

(10) 入手先 _____

(11) 収集地 _____

(12) 利用情報 (著作権等) 使用料有無 _____

(13) 時間 記録内容

分	秒	81 秒	Bカム・VHSにも同一内容あり。下記参照。
分	秒		(A → R-3・R-4)
分	秒		(VHS → 002 H)
分	秒		
分	秒		
分	秒		

図1 「ヒューマン」シリーズの保管個票（データシート）の一例

2011年7月12日、千葉市の放送大学学園にてプロジェクトメンバーおよび制作部関係者との打ち合わせを行い、翌13日、1階食堂前に位置する永久保管庫内の資料調査を開始した。永久保管庫は低温度での管理がなされ、資料の劣化対策が一定程度施されている。（西研究棟1階）入室して右手前のスペースは、いわゆる法人文書の間書庫的に扱われているようであり、奥の移動式書架にその他の放送番組教材とともに、「ヒューマン」シリーズの映像群が収蔵されていた。向かって右から2列目、3列目の通路沿いの書架の各所に、各シリーズの塊ごとに配架されていた。

資料の種類はD3、ベータカム、そしてVHSのテープ3種、数枚のMD（エチオピア）、そしてデータシートと呼ばれる保管個票（図1）の束である。関係者への事前の聞き取りによって、D3テープが放送番組制作時のマスターとなっていることから、15番組に対応するD3テープの所在確認およびその全数の把握を主たる目的とし、目録化作業に着手したが、ベータカムしか残っていない番組があることが明らかになり、また幸いにも上述のデータシートが存在していることが明らかになったため、途中でデータシートの写しを持ち帰り、一覧化する作業へと方針を転換した。

アルバイト等によるデータ入力作業によって、776件（B5版446件、A4版330件）のデータシートの入力が完了し、「ヒューマン」シリーズに関わる映像資料の概数を把握することが可能になったため、8月25日に、再度放送大を訪問し、関係者と映像のデジタル化

の方針を中心に打ち合わせを行った。「ヒューマン」シリーズのラッシュ映像資料群の教育・研究的価値をさぐる本プロジェクトの調査、研究のための閲覧用であればD3より作成されたであろうワークテープVHSをデジタル化することで当面足りるかもしれないが、その先のさまざまな活用可能性を念頭に置いた資源化を担保するには、番組制作用マスターのD3を適切にマイグレートする（現段階ではその他の放送教材資料とおなじようにXD-CAMにコピーする）ことが重要であるということでも方向性の一致を見た。また2011年度の時間的・費用的制約を検討し、「ヒューマン」シリーズのうち「ヒト」を扱った6番組—『牧民民の社会と文化—ケニア』、『農耕民の社会と文化—エチオピア』、『呪術・宗教—カメルーン』、『家族・結婚—ケニア』、『砂漠の民の社会と文化』、『狩猟採集民の社会と文化—カメルーン』—に関わる映像資料群を当該年度のデジタル化および調査研究の対象と定めた。また、上述の通り、D3をコピーのための原本とし、D3の無いものについてはベータカムを原本とした。ベータカム（約30分）が現地撮影時のテープ、D3はロケ収録後、番組制作用にベータカム2本分を収録したもの（約60分）である。幸い、当該対象資料群についてはD3もベータカムも存在しないものは無かった。なお、2回目の放送大学訪問調査においては、永久保管庫内に見つけうるテープ本数の確認とデータシートの照合を行い、またベータカムのラベルやケース外装、同封の撮影メモに記される情報を撮影によって取得した。データシートの記載事項には、シーンごとの撮影内容が日付や時間と共に別記されているものが複数見られるが、撮影テープであるベータカムに記載されている情報の方が、日付や場所等が詳細に記されており、研究資料として有用な、いわゆるリッチな情報であることが、2者の情報の比較により明らかになったためである。

閲覧用映像の仕様については、本アーカイブ化プロジェクトメンバー以外の調査協力研究者（監修者を含む）の映像閲覧を可能にする一方で、映像データの無制限の流出を避けるべく、調査メンバーと協力者間で交わす覚え書きを策定処理することを前提にして交渉し、利用のしやすい形での閲覧用映像データの入手を許された。利用する側と保管管理する側の2者間の交渉は、資料についてそれぞれの配慮すべき集団との関係もあり、センシティブかつ率直なやり取りが、大筋においてもまた技術的な細部においても必要で、非常に協力的であった制作部との交渉でも1か月以上の時間を要した。なお、原本の選定はデータシートの記載事項を基にして依頼し、制作部のスタッフによる永久保管庫からの現物テープのピックアップによって実際のコピー原本とした。これを放送大学におけるデータ変換のワークフローにのせ、XD-CAM化し、その際生成されるMXFファイルを変換してDVDデータが作成された。

11月上旬に第一弾『狩猟採集民の社会と文化—カメ

表2 ラッシュ・フィルムのアーカイブ化活動記録

日付	作業内容
2011年2月	放送大学にて予備調査、一部ラッシュ・フィルムの閲覧
2011年7月12～13日	放送大学にて第一回目調査
2011年7月下旬～8月上旬	データシート（保管個表）のExcelデータ化
2011年8月25～27日	放送大学にて第二回目調査（データ化交渉、βカムラベル、全作品視聴）
2011年9月27日	「家族・結婚」（ケニア）監修者太田至氏への聞き取り調査
2011年10月中	放送大学制作部とXD-CAM化費用、DVDコピーの交渉
2011年11月初旬	第一弾「カメルーン」のデータ入手
2012年1月30日	第五弾「ボツワナ」のデータ入手完了
2012年3月2～3日	「狩猟採集民の社会と文化」（カメルーン）監修者、佐藤弘明氏、および研究者コミュニティへの聞き取り調査
2012年3月18日	前放送大学学園制作部・「ヒューマン」シリーズ担当ディレクター、野崎剛一氏電話インタビュー
2012年3月23～24日	放送大学学園制作部担当ディレクター、野崎剛一氏インタビュー

表3 Excelに整理・入力した作品データ例

ロール	時間1	内容	行動	時間2	内容	行動	時間3	内容	行動
001H	00:16		車移動	05:50		風景	16:40		ジャー川 船主 観移動
002H	00:18		赤い花と家	01:04		果実	01:07		籠を背負って出 かける女性
003H	00:16		サイチョウ	02:54		頭に荷を乗せ歩 く老婆	04:03		サイチョウ
004H	00:16		カカオ農園	04:20		家造り 農耕民 の手伝い	07:10		夕景
005H	00:16		踊り（ブマ）	06:35		フォークダンス	09:25		木材採集
006H	00:20		蝶	03:20		湿地森	11:45		ラフィアヤシ
007H	00:20	キャンプ	跳ね毬	06:16	佐藤先生解説	毬猟	17:19	キャンプ	テテで休む男
008H	00:20		ダイカーを村に 持ってくる	02:50		ダイカー解体	07:00	佐藤先生	子供に菓をあげ る
009H	00:20	キャンプ	村風景	00:53	キャンプ	弓を持つ子供	02:50	キャンプ	出発、歩き
010H	00:20	シロアリ	巣を壊し捕る	18:00	シロアリ	伊谷先生食べる	21:42	佐藤先生解説	シロアリ
011H	00:20	佐藤先生解説	かい出し漁	03:18	かい出し漁		22:38	かい出し漁	魚を葉の上に広 げる
012H	00:20	キャンプ	昔話	15:30	キャンプ	毬見回り	24:15	キャンプ	寺島先生
013H	00:20	キャンプ	ヤマイモの穴 掘る	10:28	キャンプ	槍を持った男が 歩く	11:33	キャンプ	イヌ
014H	00:20	分配	ナマズ分配	04:00	佐藤先生解説	分配	11:55		朝のキャンプ
015H	00:20	対談	伊谷、寺島、佐 藤	30:28		対談用インサ ート	32:56	対談	伊谷、寺島、佐 藤
016H	00:20	エジェンギ	ラフィアヤシを 取りに行く行列	02:10	エジェンギ	ボヨをとる女	22:00	エジェンギ	エジェンギの歩 く音
017H	00:22	エジェンギ	登場	05:06	エジェンギ	踊り	10:00	エジェンギ	結界の奥へ
018H	00:16	キャンプ	ハチの巣偵察	05:22	キャンプ	男の子守	06:52	キャンプ	火打ち石で火を つける老人
019H	00:18	はちみつ		01:30	はちみつ	木に登る	06:46	はちみつ	足場を作る
020H	00:20	ヤマイモ	ヤマイモをとっ てかえってくる 女	04:52		ハリナシバチ	06:20	佐藤先生解説	平均身長
021H	00:20	サル猟	サル解体	03:06	サル猟	サル調理	04:41	サル猟	サル頭丸焼き
022H	00:20		子供木登りして 果実をとる	05:35		鍋の中の果実	06:30		夕方のキャンプ
023H	00:53	佐藤先生解説	ルール規範	06:51	佐藤先生解説	農耕民にはなら ない	12:19		農耕民の村
024H	00:23	村	男の子守	03:45	村	バンジョの男た ち	07:00	佐藤先生解説	バンジョ
025H	00:10		占い	17:00		占いの結果	35:42		子供

ルーン』関係のラッシュ・フィルムデータを入手し、1月末に第五弾『砂漠の民の社会と文化』関係のラッシュ・フィルムのデータが完成するまで、データ化の済んだ番組ごとのラッシュ・フィルムが順次、放送大学制作部から郵送された。

デジタルマスターとなるXD-CAMへのコピーについては、対応関係の混乱を避けるためオリジナルテープ（D3あるいはベータカム）と1対1で対応すること（XD-CAMに複数原本を集約しない）、オリジナルとの対応関係がとれるようなメタデータを付与することを定めたが、その他は制作部の実施している放送教材一般の仕様と同様である。閲覧用映像データについては、各番組名+データシートに記載されるロールナンバー（R-006など）あるいは番組内の識別ナンバー（151Hなど）、この2つの数字が無い場合は、保管庫内に収蔵する際に付与される8桁の資料管理番号（G36A2806など）+データシートに記されるサブタイトル（クリーンピクチャ、英語版、など）をデータ名として付し、各データの識別、番組ごとの視聴分析の利便性、およびD3およびXD-CAMへの対応を担保した。当該年度にマイグレーションを行った映像データは次の通りである。

- ①『牧畜民の社会と文化—ケニア』34本（うち10本は家族・結婚のタイトルのもの、1本は参考資料。）
 - ②『農耕民の社会と文化—エチオピア』32本
 - ③『呪術・宗教—カメルーン』27本（うち1本はニホンザル関係のもの。）
 - ④『家族・結婚—ケニア』19本（うち1本は農耕民、牧畜民、家族結婚の3番組に対する伊谷氏解説映像。）
 - ⑤『砂漠の民の社会と文化』31本（うち23本がロケテープで、ベータカム（約30分収録）を原本とする。）
 - ⑥『狩猟採集民の社会と文化—カメルーン』27本（うち1本は呪術宗教のタイトルを付されている。）
- その他 2本（伊谷純一郎氏追悼のための映像。）
以上、合計172本。

なお、これらの閲覧用映像データとデータシート等に記載されていた各映像内容テキスト（表3）を連動して視聴できるように、また映像を視聴しながらコメントやアノテーション、メタデータを付せるようにするために、フリーのアプリケーション（ELAN）を活用して、ラッシュ映像の分析・調査を行えるようにした。

こうした資料そのものに直接関わる作業と併行して、あるいは作業後に、番組を監修した研究者、ラッシュ映像を研究に活用しようとする研究者コミュニティ、放送大学学園の制作ディレクターにそれぞれ資料に関係する話を聞いた。これらの聞き取り内容は、本稿の各部に反映されているが、その詳細については別稿に改めたい。

4. 映像素材の教育研究への還元

4-1. 「狩猟採集民の社会と文化～カメルーン～」の作品概要

シリーズのうちの1巻である「狩猟採集民の社会と文化～カメルーン～」(監修：伊谷純一郎、佐藤弘明、寺嶋秀明。本稿では、以下「カメルーン」とする)を取り上げて、「ヒューマン」ラッシュ・フィルムの学術的価値や教育研究活動への還元方法について検討を加える。「カメルーン」は、「ヒューマン」シリーズの中でカラハリ砂漠に住む狩猟採集民サンを扱った「砂漠の民と文化—ボツワナ」と並んで、「狩猟採集民」を扱う重要な位置づけにある作品である。シンプルだが、「人類史の中で最も長い時間営まれてきた重要な生活様式」であるとして紹介されるのは、中部アフリカのコンゴ盆地に広がる熱帯林に居住するピグミー系狩猟採集民集団の一つであるバカ(Baka)の人びとの生活であり、森の狩猟採集民の代表として取り上げられている。

作品では、バカ人の生業基盤である、男性による狩猟活動、釣り、蜂蜜採集、女性による掻い出し漁、シロアリ採集など狩猟採集活動のうちの主要なものがほとんどカバーされている。これらの活動を行う生き生きとしたバカ人の映像はたいへん魅力的である。狩猟採集活動の紹介とともに男女の社会的分業や獲物の分配に見られる平等主義的態度など、ピグミー系狩猟採集民の社会の一般的特徴について分かり易く解説が加えられる。

森の狩猟採集キャンプでの生活の様子だけでなく、現在では半定住化したバカ人の定住集落での暮らしについても農耕受容や近隣農耕民との民族間関係を中心に詳細に紹介される。また、生業だけではなく、日が暮れてから行われる精霊儀礼の踊りや音楽、リカノと呼ばれる民話の語りなど精神世界にも踏み込んだ作品構成になっており、45分の中に森の生活の魅力がぎっしり詰まっている。

4-2. ドンゴ村における研究史

「ヒューマン」シリーズの人間社会を扱った作品の特徴は、撮影後もそのロケ地の多くで断続的・継続的に研究が継続されていることである。「カメルーン」もそれに違わず、撮影後も現在に至るまで、本稿の執筆者の一人大石を含む中堅・若手研究者により断続的・継続的に調査研究が続けられている。「カメルーン」のロケが行われたのは中部アフリカ、カメルーン共和国東部州ブンバ=ンゴコ県モルンドゥ郡ドンゴ村である。ここでは、ドンゴ村における研究史を振り返り、そのうえで本作品の撮影当時の学術的文脈とともに、対象社会の状況を把握しておく。ドンゴ村における本格的な調査研究は、1994年に佐藤弘明博士(当時・浜松医科大学)によってはじめられた。

ドンゴ村は、カメルーンとコンゴ共和国の国境を画

すコンゴ川の支流、ジャー川に面している。周囲はコンゴ盆地に連なる熱帯雨林に囲まれ、年間を通して湿潤温暖な気候下にある。植生は半落葉性と常緑性の熱帯雨林が混交している。住民の総人口は約600人であり、その民族構成は、ピグミー系狩猟採集民バカが約60世帯300人、農耕民バクウェレが約40世帯250人、商業農民ハウサが約50人である（大石 2010）。約5 km四方に、6つのバカの定住集落と3つのバクウェレの定住集落が分布し、それらのうち2つは極めて近接し、混住に近い状況が見られるようになっている（林 2000）。

バカは、現在十数集団が知られる中部アフリカのピグミー系狩猟採集民の中では早くから定住化が進んだ（Hewlett 1996）。かつては狩猟採集を主な生業としながら森の中で遊動生活を送っていたが、カメルーンでは少なくとも1950年代までに焼畑農耕の受容を開始し、徐々に定住化が進んだ（Althabe 1965）。バクウェレは、バンツー系の言語を話し、親族集団を単位としてジャー川沿いに点々と小集落を作って焼畑農耕と漁労を中心とした生業を営む（大石 2010）。バカは、ウバンギアン系の言語であるバカ語を話すので、両者は異なる系統の言語を使用する。両集団の間で正式な通婚関係はほとんどみられない。

池谷（2002）によれば、1960年代以降に本格的に始まった狩猟採集民を対象とした生態人類学研究は3つのパラダイム区分に分けられる。すなわち、第一期が自然と人の共生的関係や生態的適応が強調される「伝統主義」的アプローチ、第二期が狩猟採集民が民族間の文化接触や政治経済的要因によって周縁化されるなどして社会的に構築された存在だとみる「修正主義」的アプローチによって特徴づけられ、第三期が「先住民」運動など政治的に主張する存在としての狩猟採集民研究であるが、日本の生態人類学では最近に至るまで「伝統主義」的な研究が大半で、「修正主義」的な研究はほとんどみられない。

伝統主義者と修正主義者の間の「狩猟採集民」の真正性をめぐる論争は、カラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）をめぐる始まり、1980年代終わりに、やや遅れてピグミーに飛び火した。それは具体的には、Baileyらにより提起された、熱帯雨林で狩猟採集民は農耕民の提供する農作物に頼らなければ生きてゆけないのではないかと言う問題提起であり、キャッサバや料理バナナなど農作物に代わるだけの植物性炭水化物源（野生ヤマノイモ）が森の中にあるかどうか論点になったため、「ワイルドヤム・クエスチョン」と呼ばれている（Bailey et al. 1989; 論争のその後の経緯については、安岡、2010を参照されたい。）。佐藤はこの論争が提起された直後から一貫して、「伝統主義」的立場から熱帯林内の狩猟採集生活の自給可能性について研究を進め、カメルーン東南部での植生調査に基づき、熱帯雨林が供給可能な可食野生ヤマノイモの現存量の推定を行い（Sato, 2001）、可食野生ヤマノイモが群生する植生パッチを発見した（Sato, 2006）。

さらにバカ人の被験者家族の協力を得て、数週間にわたる実験的狩猟採集生活の観察を森林産物の端境期だとされる時期を含む各季節に行った結果をもとに、アフリカ熱帯林では狩猟採集民によるほぼ通年農作物に依存しない狩猟採集生活が可能であると主張している（佐藤ら、2006; Sato et al. 2012）。

佐藤とほぼ同時期に木村大治（京都大学）がバカ人の発話と沈黙に関する行動学的研究を開始し（木村、2003）、それは発話形式から会話分析による発話内容の研究へと発展する（木村、2010）。1995年には、山内太郎（当時・東京大学大学院）が佐藤とともに定住集落におけるバカ人の日常生活や栄養・成長に関する人類生態学的な調査を開始し（Yamauchi et al. 2000）、その研究はドンゴ村以外にも調査地を広げて現在まで継続されている。

佐藤に続いて、1998年より林耕次（当時・神戸学院大学大学院）がバカの調査を開始した。林はバカの森林キャンプにおける狩猟活動について、定住的な生活スタイルとの関係のもとに分析を行った（Hayashi, 2008）。

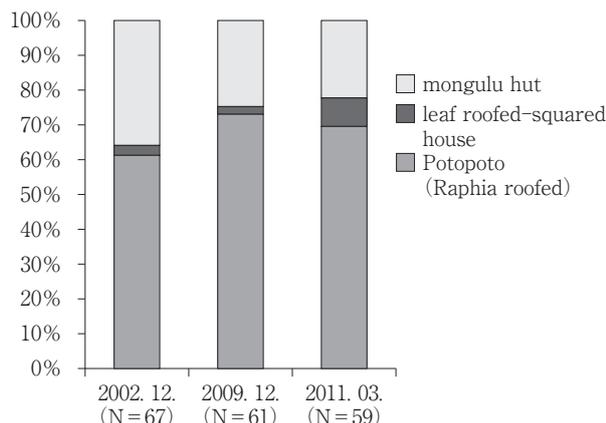
1999年には、北西功一（山口大学）がバカ人の農耕化の問題を巡って調査を開始し、現在彼らが小規模な焼畑により生産しているプランテン・バナナ栽培の実態を明らかにするとともに（Kitanishi, 2003）、貨幣経済がバカ人社会に与える影響について考察している（Kitanishi, 2006）。

2002年からは、大石高典がバカと隣接して居住する農耕民バクウェレに関する研究を開始した。大石は、河川沿いの農漁複合の実態について、ジャー川下流域に居住するバクウェレ人を対象とした研究を進めるとともに（大石、2010）、換金作物であるカカオ栽培の活発化など貨幣経済の浸透に伴ってみられるようになった社会経済上の変化が民族集団間の相互関係に与える影響に関する研究を進めている（Oishi, 2012）。

このように、ドンゴ村における日本人研究者による人類学的研究は、「伝統主義」的アプローチを基調とした研究から始まり、最近ではこれに加えて「修正主義」的な観点や政治生態学的な観点を併せ持った研究が展開されるようになってきている。ドンゴ村において、「カメルーン」の撮影が行われたのは、1996年であり、佐藤による本格的な研究が立ち上がって数年後の時期に該当する。ここまで述べてきた研究史を踏まえれば、番組制作にあたって、バカ人を「伝統的な狩猟採集民」として措定した内容を基調として構成された学術的背景が理解できる。

4-3. 「カメルーン」のラッシュ・フィルム

「カメルーン」には、約26時間分のラッシュ・フィルムが存在することがわかった。そのうち、実際の番組制作に用いられたのはそのうちわずか45分（2%以下）であった。これら未使用の膨大なラッシュ・フィルムを閲覧した。ラッシュ・フィルムのほとんどは、カメルーン東南部の熱帯林地域での現地取材により撮



ピグミー系狩猟採集民は、森の中の遊動生活においては草木でできた移動式の小屋に寝泊まりする。ドンゴ村のバカの人びとは年々定住集落で過ごす時間が長くなり、住居形態も伝統的な mongulu から土壁でできた potopoto へと変化してきている。

図2 ドンゴ村のバカの人びとの住居形態の変化

影された一次資料である。その中には、研究者によるナレーション撮影を含む台本に基づいた演出のための意図的な撮影が行われた部分と、そうではなく、取材班が出会った集落内の人びとの日常生活や天文・自然風景などがそのままに撮影された相対的に撮影の意図が感じられない部分が混在している。後者は、当初番組制作において、主要な場面の切り替えやつなぎのための予備の映像素材として撮られたと推定されるが、前者に比して相当長い時間の撮影がこれに当てられている。

ラッシュ・フィルムを見ていると、研究者が対象社会を撮った映像とは異なる、番組制作のための「映像のプロ」による撮影資料という点で新鮮な感覚を覚えさせられる。研究者が撮影する映像とは異なる特徴として、(1) 対象社会の特定の側面だけでなく、天文、動物、植物などの広い範囲の被写体が満遍なく撮影されていること、(2) 対象から距離を置いた「自然」な映像資料であることなどが挙げられる。

一方で、被写体となった人びとには明らかな偏りがみられる。ドンゴ村にはバカ人集落が5つあるが、被写体となっている人びとの多くは、佐藤ほかの日本人研究者が調査のベースとしていたモカカサ集落の人々であり、特に高頻度で撮影されているのはMG、DD、YBなどの数世帯に限られる。これらの人びとは、研究者による調査研究を受け入れ、主要なインフォーマントとなってきた人々である。また、バカ人以外の住民は偶然映ったと思われるシーンを除き、ほとんど記録されていない。実際の現地社会の住民構成はバカ人だけでなく、バンツー系言語を話すバクウェレ人（焼畑農耕民）やハウサ人、フルベ人など（商業民、商業農民）のバカ人以外の住民はまとめて「農耕民」とされている。「狩猟採集民の生態と社会」と言うテーマ

設定の影響もあってか、脚本にある意図的な演出によるカカオ農園での賃労働の場面以外に、作品中にはこれらの人びとは出てこない。

4-4. 過去15年間の社会文化変容

撮影から現在に至る15年間に、ドンゴ村のバカ人を取り巻く環境は大きく変化した。都市からの労働者や商業民の一部が定住化し、貨幣の流通が本格化した。現在では多くのバカが、バクウェレや商業農民のカカオ農園での農作業を手伝いつつ、換金作物であるカカオの栽培を自ら行うようになっている（Oishi 2012）。それにともない、個人間にも経済格差が生じ始めており、かれらの社会における平等主義規範を維持しながら、どのようにして新しい社会経済状況に対応できるのかが問われているように見受けられる（Oishi 2012; 林&大石、2012）。

現金収入の用途について聞き取り調査を行った結果、特に狩猟キャンプで広範に分配が行われる食物とは異なり、得られた現金の分配範囲は親族の一部に限定されていた（Oishi 2012）。その代わり、少なくない金額が酒やたばこなどの嗜好品の購入に充てられ、それらが居住集団の中で分配され、愉しみの場もたれている（林&大石 2012）。しかし、現金収入の差は、商人からの商品購入によって得られる、ラジカセ、工場製のかばんなど近代的な物質文化の所有/非所有や居住形態、一夫多妻の増加傾向、バカによるバカのカカオ農園での雇用といった現象に現れつつある。例えば、定住集落内で見られる住居の多くが、バカ語でモングル（mongulu）と呼ばれる、木の枝とクズウコン科（Maranthaceae）の葉でつくられる半球形のドーム状の形式⁵から、大半が農耕民の定住集落における伝統的家屋である土壁づくりの方形家屋をラフィアヤシの葉で葺いたポトポト（potopoto）と呼ばれる形式に変化している（図2）。経済的に余裕のあるバカ人の中には、ラフィアヤシの屋根に満足できず、扉に南京錠を付けたり、トタンの屋根への葺き替えを計画して貯金を試みる者も出てきた。2012年2月の調査では、あるバカ男性は会話中に、「もはやBK（定住キャンプの名前）は、森ではなく村になった。」という印象的な言葉をもらしていた。

「カメルーン」の映像素材は、15年前のバカ人たちの集落景観を良く記録しており、現在みられる民族間の混住状況がつい最近になって生じた現象であることや、布一枚から洋服着用へという服装の変化、かつては定住集落周辺にも多くのモングルがあったことなどが直接確認できる。現在の集落や人びとの状況と映像資料を突き合わせることによって、この間の微細な社会文化変容を発見することができる。また、ラッシュ・フィルムを使うことにより、被写体となった人びとのその後や、親族間関係、生活史についてのデータ収集をより高い精度でおこなうことが可能になること

⁵ おもに女性によって作られ、わずか数時間で身近な植物を材料とするため、移動居住に適する。



図3 映像にみるDDの娘EWの成長

DD(左の写真の男性)の娘のEWは、1996年の「カメルーン」撮影時には生後間もない乳児であったが、2011年の調査時にはEWは出産して一児の母となっていた(右写真)。

が確認された。

4-5. フィールドワークの教育/実践における活用

研究者への聞き取り調査の結果、「ヒューマン」シリーズのビデオ教材の鑑賞をすること自体が、現代アフリカ社会を対象としたフィールドワークに赴く前の大学院生や若手研究者にとって、実際のフィールドワークの予備的トレーニングになっていることが明らかになった。若手のみならず、撮影に関わった研究者の中には、現在でも調査に赴く前に毎回欠かさずビデオ教材あるいはラッシュ・フィルムを鑑賞して、現地語に耳を慣らしたり、対象社会の人名を確認したりしているという者がいた。

ビデオ教材は背景音乐やナレーションと現地の人びとの会話が往々にして混じり合っているが、ラッシュ・フィルムではそのような事がないので、適切に場面を選んで視聴することにより、当該社会の社会や文化だけではなく、言語に関心のある研究者も疑似的なフィールドワーク体験をすることができるだろう。擬似的なフィールドワークは、臨地研究の準備のみならず、教育にも応用可能である。縄田が論じているように、民族誌的な一次資料の中でも、様々なイメージや情動を喚起する力のある映像資料は、適切な方法で授業に取り入れることにより、受講者にヴァーチャルなフィールドワークを体験させ、異文化について考えさせることができる格好の材料なのである(縄田 2005)。

意図的な設定ではなく撮影された、非意図的な撮影場面は、インタビュー形式ではなく、様々な場面での自然な会話が取れており、それらは、日常会話の分析による相互行為研究への資料活用の可能性が考えられる。

これらの教育研究への利用は、場面ごとに詳細なインデックスを作成し、一括検索を掛けられるようにす

ることでさらに効果的かつ効率的に行えるようになると考えられる。

4-6. 取材対象社会への還元

文化人類学の分野において、調査対象社会への研究成果の還元が言われるようになって久しい。しかし、フィールドワークの成果として得られる観察結果や民族誌は、ほとんどの場合調査対象社会の外に向かって書かれており、そのままの形では容易に現地社会の多くの人びとと共有できるものではない。その点、映像資料は誰にも分かりやすく、過去の記憶の結節点となって住民と研究者のコミュニケーションの媒体となるだけでなく、ホームビデオのような装置のない住民にとっても過去を共有する媒体として大変貴重なものである(大石 2011)。近年、このような映像資料の特性を活用した、人類学者による参加型映像実践の試みも盛んになりつつある。例えば、分藤はバカ人の先住民としての権利を守ろうと活動するローカルNGOメンバーを対象に行った、映像作成ワークショップの実践例を報告している(分藤 2012)。

ドンゴ村において、2011年度に都合3回「カメルーン」の作品および一部ラッシュ・フィルムの上映会を実施した。合計26時間にもなる長時間に及ぶ素材映像を全て上映することは電気に不自由な調査地では困難であるが、地域社会の人びとには十分に楽しんでもらえたと思う。アフリカ熱帯林の狩猟採集社会も、周辺農耕民の社会も文字による記録の習慣がないため、「歴史がない」社会などと言われることもあるが、上映時には、大きく成長した青年の幼少時の姿や、既に亡くなった人びとの映像に人びとは大きく反応した(図3)。再生機器を持っている人がいないので、現段階ではかれらが見たい時に、見たい映像資料にアクセスすることには困難があるが、どのようにしてラッシュ・フィルムに刻まれたかれらの過去を共有すること

ができるのかを考えてゆく必要があると考える。

5. 放送教材作成のための映像素材の再資源化にむけて

「ヒューマン」映像を含む放送大学映像の再資源化については、教育研究、そして広報あるいは商用の利用が考えられる。ここでは、教育研究を対象に検討を加えたい。教育資源化については、そもそもの制作意図である放送教材としての利用に立ち返って検討を始めるべきであろう。放送大学教員で文化人類学者の祖父江孝男⁶は、1998年にまとめられた放送大学のテレビ番組に対する評価報告（放送大学、1998）と放送大学関係者によって1980年代半ばに発表された論文を引いて、放送大学のテレビ番組の表現形式を次の6タイプに整理し、また各形式の特性項目についても取り上げている。1. スタジオ形式、2. 教室（1カメラ）型式、3. 教室（3カメラ）型式、4. 中継型式、5. ドキュメント（講師）型式、6. ドキュメント（ナレーター）型式（祖父江、2003。ただし発表そのものは、1987年に行われている）。

本「ヒューマン」シリーズは、フィールドワークという番組内容、および上記の各表現形式が持つ特性と評価の中から、おもしろさ、迫力、学習意欲の項目を考慮して、主に4から6のスタイルの混合として制作されたことが考えられる。また、シリーズ全体をオーガナイズする講師である伊谷氏が、各番組の冒頭と終わりにバストショットで登場し、各論をシリーズにまとめ上げる解説を加える構成をとっており、上記タイプ分けの中の1. スタジオ形式の特性であるわかり易さの要素を表現形式の中で意識した形で構成されていることが考えられる。祖父江が引いた先行研究は、放送大学設置直後の1980年代半ばの、実験番組時代の番組制作論・評価調査の盛り上がりのなかで生み出されたものであったが、2003年の再報告まで15年近く間があくのは、その間、ひとつひとつの番組制作に対する講師および制作者（ディレクター）からのレビュー的調査・研究が姿を消したことによる。その一因として、1989年の大学共同利用機関「放送教育開発センター」への改称に際して、『MME研究ノート：Multi Media Education』の廃刊による影響が大きいように思われる。

放送や映像、あるいは映像視聴などの教育面については、放送大学関連の紀要や報告に発表されているが、制作ディレクターの関与する調査研究については数が少ない。「ヒューマン」シリーズの制作にあたり、制作部や企画者が、放送大学初期に取り組みされた表現形式研究をどの程度意識したかはまだ明らかではない

が、制作予算の申請に関わるいわゆるアーカイブズ文書や制作関係者等のメモなどの個人文書にその痕跡が残っている可能性はあるだろう。たとえば、「ヒューマン」シリーズのディレクターの一人である野崎剛一氏の個人文書群の中に、そもそもの企画段階において祖父江孝男氏や米山俊直⁷氏らの意見を伺いながら立案されたことなどが伝聞の形で記されており、上記表現形式に関する意識的な制作実践があったと考えることの根拠になるだろう。いずれにせよ本「ヒューマン」シリーズに対しては、監修者（講師）、制作ディレクター、あるいは学生からのレビューや評価が実施、あるいは公にされないまま、10年以上が経過してしまっている。教育的放送映像の制作という放送大学のいわばアイデンティティを鑑みる場合、その大学史・法人史の中でメルクマールとなる本シリーズを、さしあたり放送大学番組制作論の視点から検証し直すことが、その教育資源化の大きな要素となるだろう。また、放送大学の組織体としての内外のさまざまな動きや歴史が、この「ヒューマン」シリーズの制作背景にあることは確かである。そのような複雑な状況の中で生み出されたラッシュ映像素材が教育研究資源（アーカイブ）として活用される際には、その素材性質に大きな影響を与えるファクターは、いわば注意書きとして提供される必要がある。さらに、こうした背景が放送大学の法人文書のアーカイブズに裏付けられれば、素材映像はより実証的な研究の中で取り扱われることが可能になるだろう。こうした総合的な資料連関を含むアーカイブを構築し、メディア研究の体制を整えることで、放送映像を通じて教育を行うという放送大学の独自性が際立っていくのではないかと考える。

6. おわりに

本稿では、「ヒューマン」素材映像のアーカイブ化の作業経験を通じて得られた知見をまとめ、それを踏まえた提言を行った。素材映像の研究資料的有用性の分析・検証については、「狩猟採集民の社会と文化〜カメルーン〜」のラッシュ・フィルムについて重点的に行い、当該フィールドを対象とする研究者グループによる視聴によって、対象社会の時間的変化や同一性をはじめとする、さまざまな研究視点に耐える貴重かつ有用な映像資料であることが確かめられた。特に、最近15年は現代アフリカ社会が貨幣経済化やグローバル化の展開により激しく変動した時期に相当することから、これらの社会の変容を映像資料から裏付ける基礎資料になりうる。今後、「カメルーン」以外の作品についても、研究者によるラッシュ・フィルムの閲覧と再検討、そして新たな情報付与によって、

⁶ 祖父江孝男：ソブエ タカオ、1926-2012、文化人類学。アラスカ・エスキモーや現代日本における文化変容などの研究を行った。明治大学教授、国立民族学博物館教授、放送大学教授を歴任した。

⁷ 米山俊直：ヨネヤマ トシナオ、1930-2006、文化人類学。日本やアフリカ農村、日本の祭礼の研究で知られる。京都大学教養部教授、大手前大学学長などを歴任した。

教育研究素材としての有効性を増大させることができると示唆された。

ラッシュ・フィルムの学術資料としての価値は、以下にまとめられる。(1) 現代アフリカ社会、とくに生態人類学が主たる対象としてきた「自然に強く依存」した社会の貨幣経済化やグローバリゼーションへの対応を映像資料から考察するための格好の資料であること。(2) 同時に、ラッシュ・フィルムは、研究者だけでなく、被写体となった人びとやその属する地域社会にとっても大変意味あるものであり、方法になお検討が必要であるものの対象社会への還元には様々な可能性があること。(3) 映像資料にメタデータを付加することにより、調査地を共有しない研究者を含む、より広範な利用者が活用できる教育研究のためのアーカイブ・データになりうること。

本稿で取り上げた「ヒューマン」シリーズの事例は、取材過程で生まれた学術価値の高い映像一次資料は、適切な方法でアーカイブ化されることにより、さらなる教育研究上の価値を生み出しうることを示している。このような実践は、放送大学に蓄積された映像資料の活性を高め、ひいては放送大学における教育研究と映像教材作成の間により再帰的な知的生産のループを生み出すことに貢献するだろう。

ラッシュ・フィルムを活用することによって、新たな放送教材の作成も可能になる。例えば、「ヒューマン」シリーズ撮影から、既に15年以上が経過した。狩猟採集民、牧畜民、焼畑農耕民など、アフリカ各地の「自然に強く依存して生きる人びと」に焦点を当てた番組の取材対象地域では、取材後も撮影に関わった研究者自身やその次世代、次次世代におよぶ若手研究者が継続的に研究活動を行っている。かつての取材フィルムを活用しつつ、これら研究者の最新の研究成果の紹介を交え、必要に応じて最近の映像を加えて比較することにより、ユニークな放送教材作成を行うことができると考えられる。すなわち、1990年代後半の構造調整以後の社会経済変化をはじめとした、近年変容の著しいアフリカ諸地域の社会文化変容に関する授業を、放送大学独自のビジュアルな資料提示に基づいて、アフリカの各地を比較しつつ行うことができるはずである。

この15年間に、アフリカの「自然に強く依存して生きる人びと」を対象とした国内外の研究動向においても、「生態人類学」から「地域研究」へとパラダイム変換が起こっている。このような試みは、社会構造の比較による人類進化の解明という伊谷が投げかけた課題と、現代アフリカ社会と課題を共有し、解決を共に考えるような実践的な地域研究の双方を架橋する作業にもなるだろう。

謝 辞

本研究は、平成23年度放送大学学長裁量経費個人研究助成「放送大学制作部保存の『ヒューマン』ラッシュ

映像のアーカイブ化」(研究代表：内堀基光)、および日本学術振興会科学研究費補助金若手(B)「アフリカ熱帯林への貨幣経済浸透に伴う経済的不平等の拡大と住民の平等主義規範の相克」(課題番号：23720424、研究代表：大石高典)により可能となった。神戸学院大学の寺嶋秀明博士には、「ヒューマン」シリーズの素材資料について注意を促していただき、著者間の橋渡しの労をとっていただいた。放送大学制作部長高比良一道氏には、本稿の分析に使用したラッシュ・フィルムの研究利用に際して格別のご配慮を頂いた。野崎剛一元放送大学ディレクター、佐藤弘明博士(浜松医科大学)、太田至博士(京都大学)には、快く聞き取り調査に応じて頂き、多くの示唆を頂いた。放送大学スタッフ木村房子氏には、ラッシュ・フィルム資料の閲覧と取り扱いに際してご助力を賜った。ここに記して感謝したい。

参考文献

- Althabe, G. 1965. Changement sociaux chez les Pygmées baka de l'Est-Cameroun. *Cahiers d'Études Africaines*, 5 (20) : 561-592.
- Bailey, R. C. et al. 1989. Hunting and gathering in the tropical forest : Is it possible ? *American Anthropologist*, 91 (1) : 59-82.
- 分藤大翼 2012年「先住民組織における参加型映像制作の実践—共生の技法としての映像制作—」 *Review of Asian and Pacific Studies*, No.36, pp. 21-38.
- 林耕次、2000年、「カメルーン南東部バカ(Baka)の狩猟採集活動—その実態と今日的意義—」『人間文化』14号、pp. 27-38.
- Hayashi, K. 2008. Hunting activities in forest camps among the Baka hunter-gatherers of southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, 29 (2) : 73-92.
- 林耕次、大石高典、2012年、「狩猟採集民バカの日常生活におけるたばこと酒—カメルーン南東部における貨幣経済の浸透にともなう外来嗜好品の流入—」『人間文化』30号、pp. 29-43. 神戸学院大学人文学会。
- Hewlett, B. 1996. Cultural diversities among African Pygmies. In (S. Kent, ed.) *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers*, pp. 215-244. Cambridge University Press, Cambridge.
- 放送大学、1998年、『放送大学学生動態調査報告書：大学は開かれているか』、放送大学。
- 池谷和信、2002年、『国家のなかでの狩猟採集民—カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』国立民族学博物館。
- 木村大治、2003年、『共在感覚』京都大学学術出版会。
- 木村大治、2010年、『バカ・ビグミーは日常会話で何を語っているか』木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌』京都大学学術出版会、pp. 239-261.]
- Kitanishi, K. 2003. Cultivation by the Baka hunter-gatherers in the tropical rain forest of central Africa, *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 28 : 143-157.
- Kitanishi, K. 2006. The impact of cash and commoditization on the Baka hunter-gatherer society in southern

- Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 33 : 121-142.
- 縄田浩志、2005年、「教室における異文化ショックの疑似体験の試み—スーダン東部ベジャ族の憑依儀礼ザールのビデオを用いて—」 *Journal of Policy Studies*, No. 20, pp. 89-115. 関西学院大学。
 - 大石高典、2010年、「森の『バカンス』—カメルーン東南部熱帯雨林の農耕民バクウェレによる漁労実践を事例に—」、木村大治、北西功一（編）『森棲みの社会誌：アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』 pp. 97-128. 京都大学学術出版会。
 - 大石高典、2011年「民族誌の方法としてのホームビデオ」、新井一寛、岩谷彩子、葛西賢太共編『映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』、せりか書房。 pp. 141-143.
 - Oishi T. 2012. Cash crop cultivation and interethnic relations of the Baka Hunter-Gatherers in southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 43. pp. 115-136.
 - Sato, H. 2001. The potential of edible wild yams and yam-like plants as a staple food resource in the African rain forest. *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 26. pp. 123-134.
 - Sato, H. 2006. A brief report on a large mountain-top community of *Dioscorea praehensilis* in the tropical rainforest of southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 33. pp. 21-28.
 - 佐藤弘明、川村協平、稲井啓之、山内太郎、2006年、「カメルーン南部熱帯多雨林における“純粹”な狩猟採集生活—小乾季における狩猟採集民Bakaの20日間の調査—」『アフリカ研究』 69 : 1-14.
 - Sato H., Kawamura K., Hayashi K., Inai H, and T. Yamauchi, 2012. Addressing the wild yam question : how Baka hunter-gatherers acted and lived during two controlled foraging trips in the tropical rainforest of southeastern Cameroon. *Anthropological Science*, 120 (2) : 129-149.
 - 祖父江孝男、2003年、「放送大学の教育における文化人類学関係の映像が果たす役割」大森康宏編、『国立民族学博物館調査報告35：マルチメディアにおける民族学』、国立民族学博物館。
 - Yamauchi, T., Sato, H., and Kawamura, K. 2000. Nutrition status, activity pattern, and dietary intake among the Baka huntergatherers in the village camps in Cameroon. *African Study Monographs*, 21 : 67-82.
 - 安岡宏和、2010年、「ワイルドヤム・クエスチョンから歴史生態学へ：中部アフリカ狩猟採集民の生態人類学の展開」木村大治、北西功一（編）『森棲みの生態誌：アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅰ』、pp. 17-40. 京都大学学術出版会。

(2012年11月1日受理)